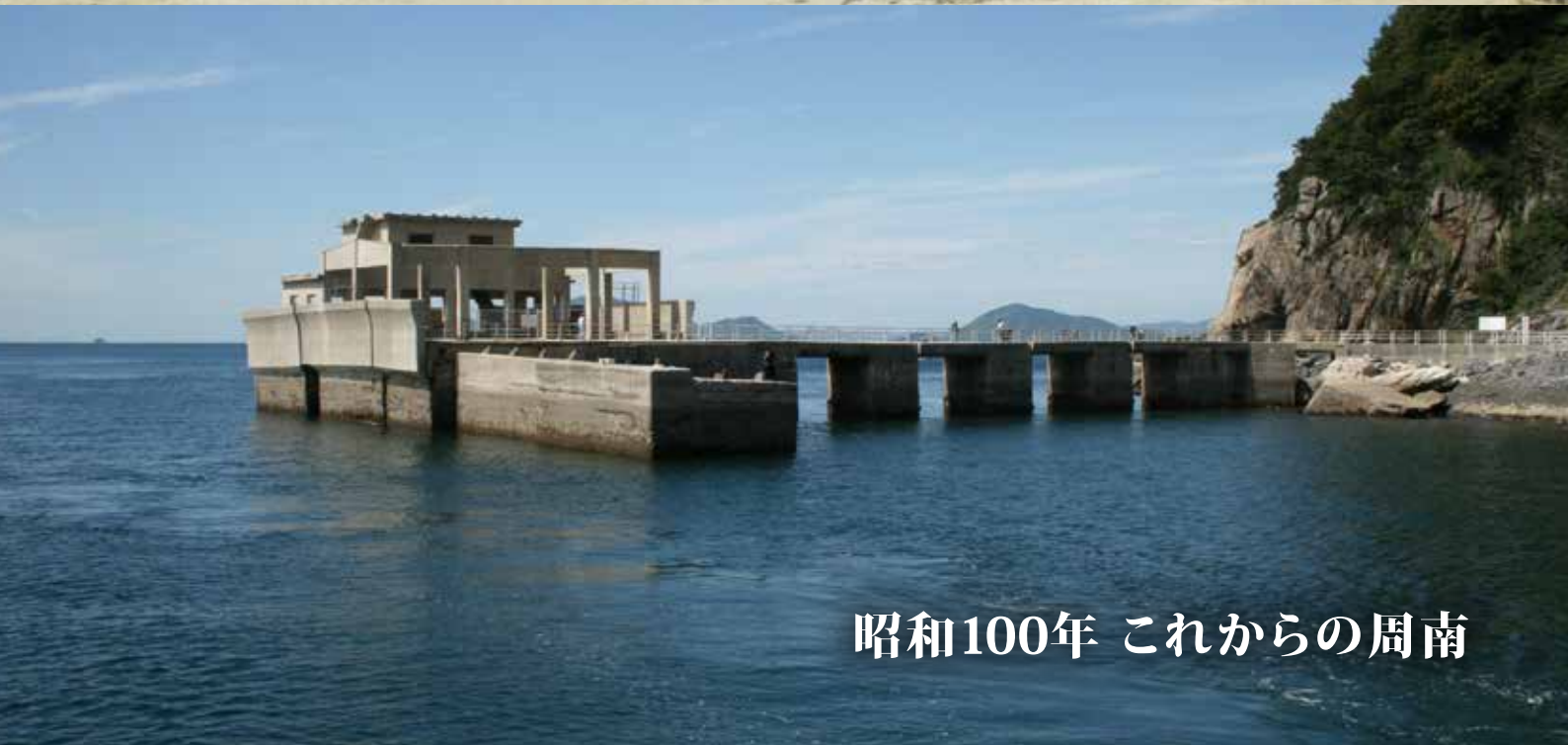


周南市 戦後80年事業



戦後80年
想いをつなぐ、
未来へ。



昭和100年 これからの周南



戦後80年を迎えて

周南市長 藤井 律子

令和7(2025)年は、太平洋戦争の終結から80年となります。

周南市においても、海軍燃料廠と市街地への2回の空襲などにより、多くの死傷者と市街地の大半を焼失する大きな被害を受けました。また、戦争末期には大津島において特攻兵器回天の訓練が行われ、全国から集まり訓練を重ねた搭乗員の多くが、戦後の日本の発展をみることなく帰らぬ人となりました。

戦後80年を迎える今日、私たちは改めて戦争で亡くなられた方を追悼し、戦争を繰り返さないことを誓うとともに、平和の尊さと命の大切さを深く自覚して、一人ひとりが行動に移さなければなりません。

また、戦後の周南市において、大切な家族や生活の糧を失う大変な混乱を乗り越え、暮らしの復興とまちの発展をめざした数々の取組についても振り返る必要があります。

未来へ向けたまちづくりに取り組むにあたり、現在私たちが暮らしている「まち」の原型を創り上げた先人の想いと願いに触れることは極めて有益と信じるからです。

現在、当時の戦禍や回天を知る関係者は少なくなり、ご高齢になられている中、これらの証言をしっかりと受け止め、記憶や記録を後世につないでいくことが、私たちの使命であると考えています。

このたび、社会が大きく変化した概ね昭和10(1935)年から昭和45(1970)年の間で、戦禍の激しかった徳山中心部を主に取り上げていますが、その他の地区においても戦争の被害や戦後の復興と無関係ではありません。

昭和20(1945)年以降、私たちは直接戦争を体験することなく80年を迎えます。しかし、世界に目を向ければ各地で戦争や紛争が絶え間なく続いている今だからこそ、過去を想い、未来への平和発信を、本市から伝えていかなければなりません。

戦後80年となる今年が、戦争と平和、命の尊さについて胸に刻むことと併せ、私たちが次の世代に受け渡す「まち」の未来について想いを馳せ、行動する契機の年となることを願うものです。



昭和35(1960)年の徳山駅前

目 次

1. 戦禍の前	2
(1) 海軍燃料廠とまちの発展	
(2) 賑わうまちと徳山公園の整備	
2. 太平洋戦争	4
(1) 要港指定と市民の生活	
(2) 回天訓練基地の開設と回天の出撃	
(3) 徳山空襲(5月10日、7月27日)	
(4) 戦争体験を語る	
3. まちの復興と飛躍	14
(1) 戦災復興都市計画の策定 1) 街路・公園の復興 2) 商店街の復興	
(2) 戦災復興土地区画整理事業の終了	
(3) 競艇事業の開始	
(4) 動物園の開園	
(5) 燃料廠跡地への出光興産進出	
(6) 周南緑地と周南団地の整備	
4. 平和を未来へ	26
(1) 回天記念館と現在に残る遺構	
(2) 平和を継承するまちづくりへ	

資料(関係略年表、参考文献)

1.

戦禍の前



①「燃料廠正門」(『徳山市史』)昭和10(1935)年頃。

海軍が徳山に煉炭製造所を開設したのは、美祢の炭鉱や呉・佐世保の軍港に近く、多くの艦船が停泊可能な良港があることが理由といわれています。燃料廠の正門は、東川沿いの山陽本線南側にありました。

②「徳山湾停泊中の連合艦隊」(『徳山市史』)昭和9(1934)年頃。

(1) 海軍燃料廠とまちの発展

徳山のまちは、明治37(1904)年の海軍煉炭製造所の開設決定後、大正5(1916)年に日本金属(株)、大正7(1918)年に大阪鐵板製造(株)と日本曹達工業(株)の工場が竣工し操業を始め、発展を続けました。

海軍は、艦艇燃料の石油移行に伴い、大正10(1921)年に煉炭製造所を海軍燃料廠(昭和16(1941)年に第三海軍燃料廠)に改め、第一次世界大戦後の世界的な石油不足に対応するため、自ら製油所を整備することにしました。原油は国内のほかアメリカや北樺太(現在のサハリン北部)、オランダ領ボルネオなどから購入してタンクへの備蓄を進めたほか、昭和11(1936)年には大迫田で用地を買収のうえ5万トン地下タンクの建設を始めました。

また、燃料廠の周辺には海軍共済組合病院のほか、将校の官舎や集会所が整備されました。戦後、焼け残った官舎などは国から市などに払い下げられ、廠長官舎は市長公舎として、海軍共済組合病院は徳山中央病院、将校集会所は徳山博愛病院(徳山医師会病院の前身)となりました。

なお、大阪鐵板製造(株)は、のちに日新製鋼(株)、現在は日本製鉄(株)山口製鉄所(周南)へ、日本曹達工業(株)は、のちに徳山曹達(株)、現在は(株)トクヤマとなっています。また、昭和10(1935)年には東洋曹達工業(株)、現在の(株)東ソーが富田に工場を建設し、翌年から操業を始めました。なお、現在の日本精蠟(株)の場所にあった日本金属(株)によって造られたレンガ造りの煙突は、使われなくなった今もそびえ、徳山港のランドマークとなっています。



徳山街の一部

①



②



③

①「徳山市街の一部（幸町から佐渡町）」昭和10（1935）年頃。
現在の徳山DECKの東周辺。

②「徳山の桜」昭和10（1935）年頃。桜トンネルを抜け、
徳山公園での花見を楽しみました。

③現在の銀座通り。

（2）賑わうまちと徳山公園の整備

大正11（1922）年に徳山港の開港が決定されると、商業や工業がますます盛んとなり、昭和10（1935）年に徳山市が誕生しました。

街並みには江戸時代の徳山藩城下町としての名残を残しながら、駅前の旧山陽道沿いとなる佐渡町や幸町（現在の銀座通り周辺）を中心として、さまざまな商店のほか銀行や旅館が立ち並び、昭和9（1934）年には岩徳線が開通し、昭和11（1936）年には新たな祭り「工場祭」を開催するなど、活気に満ちていました。

また、毛利邸のそば（現在の徳山動物園周辺）に、昭和3（1928）年に有志により設立された徳山保勝会が、祐綏神社を軸に観光客を誘致して町の繁栄を助け市民の遊園地とすることをめざし、徳山公園の整備を始めました。その後、昭和10（1935）年からは市が管理する公園となり、市民には桜の名所として親しまれ、夫婦ヶ池など多くの市民が訪れる憩いの場所でした。海軍煉炭製造所を誘致した初代町長・野村恒造の銅像や日本曹達工業（株）を創業した岩井勝次郎の記念碑なども建てられました。

なお、毛利邸や祐綏神社は戦災により焼失し、現在は文化会館と動物園が整備されるとともに、祐綏神社も再建され、今も多くの人々が訪れています。

2.

太平洋戦争



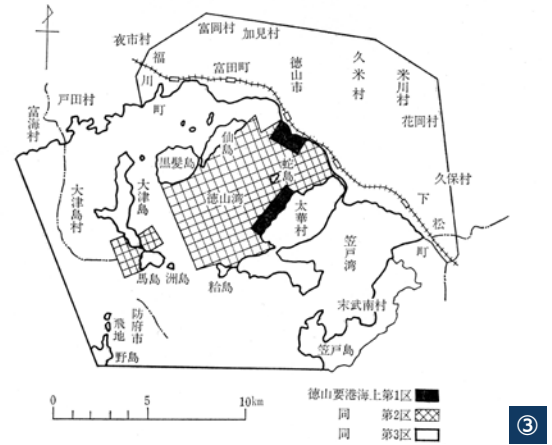
(1) 要港指定と市民の生活

徳山港は、昭和12(1937)年に日中戦争が始まって戦時色が強まる中、昭和13(1938)年に軍港(横須賀、呉、佐世保、舞鶴)に次ぐ重要な港「要港」(徳山と大湊)に指定され、自由な貿易港ではなくなりました。昭和16(1941)年には、機密保持のため要港区域内での写真撮影やスケッチが禁止されるなど、市民への制限も厳しくなりました。

軍は、機密保持のため、山陽本線を通る列車の乗客に、光市の島田川あたりから防府市の台道あたりまで海側のよろい戸を降ろして景色が見えないようにさせたといいます。また、国土地理院の5万分の1地形図は、昭和13年版では要港指定範囲が消され、市街地の様子はわからなくなりました。

昭和12(1937)年の日中戦争以降、出征する男性が増え、各地で見送りの風景が見られました。また、昭和13(1938)年の国家総動員法制定をきっかけに、生活必需品が次第に配給制となることで市民の暮らしに影響が現れました。昭和15(1940)年12月に一人当たりのコメの配給量が一日2合7勺(405グラム)とされ、その後、衣料品や味噌も配給となり、さらに塩や酒・たばこ・菓子・石鹼まで、市が発行する切符や通帳に町内会長の証明印を受けて指定の商店などで購入する方法になりました。

空襲を想定した防火訓練や灯火管制が行われ、昭和16(1941)年12月に太平洋戦争が始まり、昭和20(1945)年に東京が空襲で大きな被害を受けた後は、延焼を避けるため建物を取り壊す建物疎開が行われました。また、戦局の激化による金属資源の不足を補うため金属回収が進められ、日常生活のなかに金属を使わない代用品が普及しました。金属回収では寺院の仏具や釣鐘も供出されました。長穂の龍文寺の鐘は戦時中に供出され溶かされたと思われていましたが、平成19(2007)年に島根県雲南市の寺院が戦後に呉から取り寄せた鐘が龍文寺のものであることが分かり、里帰りしています。



- ①「徳山駅頭での出征風景」(『目でみる徳山の歴史』)。
昭和12年以降。
- ②「防空訓練」(『目でみる徳山の歴史』)。
小沢町(現在の平和通り北部)での様子。昭和13年以降。
- ③「徳山要港海上防備図」(『徳山市史』)。
昭和10(1935)年頃のもので、線で囲まれている地域が
要港に指定された範囲です。

要港である徳山を防衛するため、昭和16(1941)年に呉海軍警備隊が発足し、徳山支隊(のちに徳山海軍警備隊として独立。現在の徳山中央浄化センター付近)が、太華山や永源山、戸田の昇仙峰、大道理の大高神山など燃料廠を取り囲むように高射砲やサーチライトなどを設置しました。

また、徳山港は、警備隊とは別の呉海軍港務部徳山支部(のちに徳山海軍港務部と改称。現在の徳山海上保安部周辺)が管理しました。昭和20(1945)年5月以降、徳山港付近にもアメリカ軍による機雷敷設が始まり、6月からは航路の安全を確保する掃海を主な任務とした徳山海軍防備隊となりました。

暁部隊

横浜の二葉屋開作に、陸軍の海上輸送を担う宇品の船舶司令部が統括する陸軍船舶部隊、通称「暁部隊」が配置されました。

昭和19(1944)年8月、横浜に第二機動輸送隊本部が置かれ、輸送船を運用する部隊が編成されて日本国内や台湾、フィリピンへ派遣されました。

戦争末期には、機動輸送隊補充隊と海上駆逐隊輸送隊が配置され、徳山空襲の際には救援活動に出動したといわれます。

現在も暁町の地名が残っています。



昭和20(1945)年7月の暁部隊兵舎
(工藤洋三CD-ROM空から見た徳山の歴史)。



③基地内での見送りの様子(多々良隊。大津島基地。昭和20年4月)。

④潜水艦に乗り出撃する隊員(菊水隊。大津島基地。昭和19年11月)。

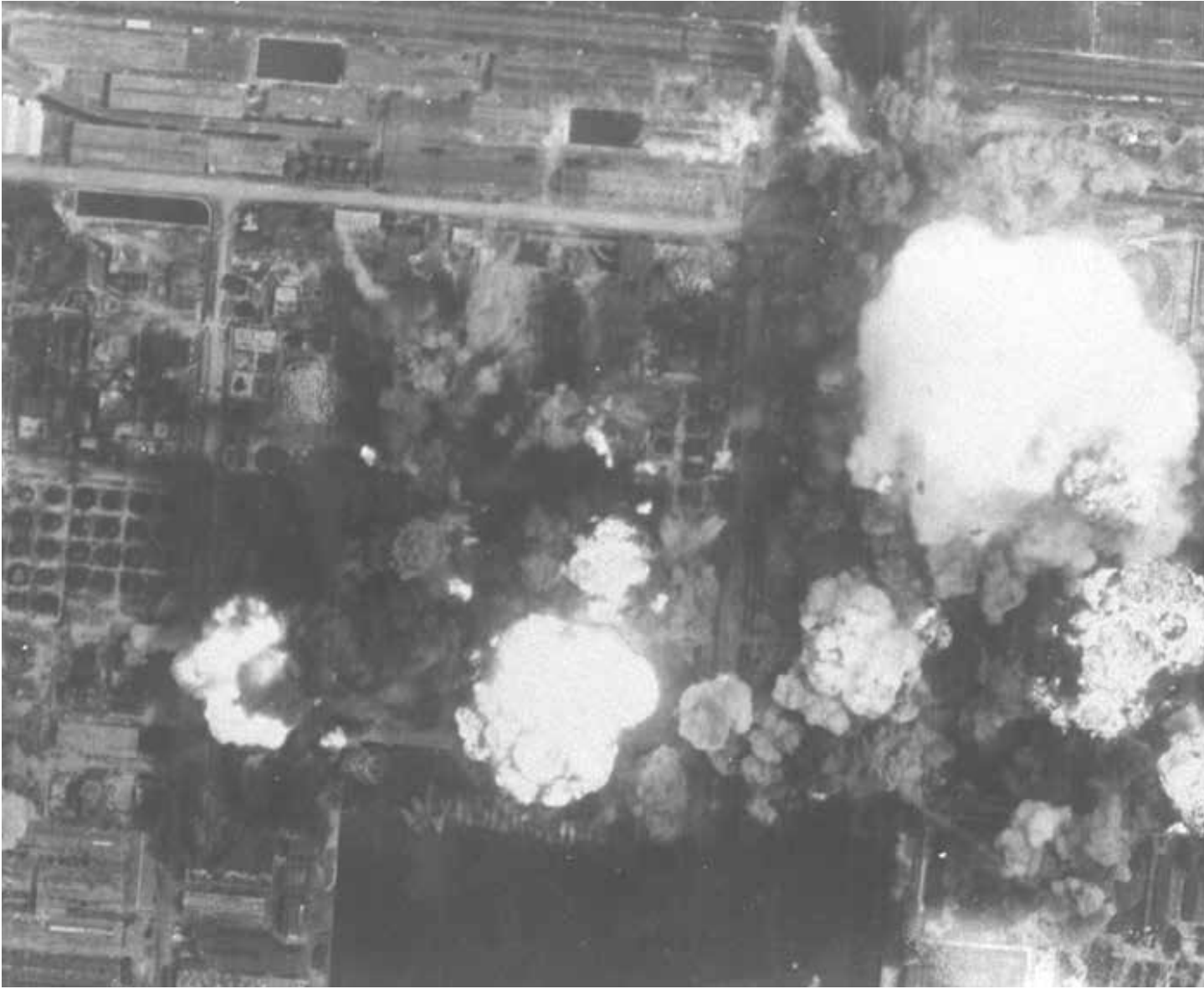
⑤出撃する隊員を見送る様子(天武隊。光基地。昭和20年4月)。潜水艦の甲板に回天が搭載されています。

同年9月、大津島の魚雷発射試験場を活用して回天訓練のため大津島基地が開設され、全国から隊員が集められ、訓練が開始されました。その後、光、平生、大分県大神にも訓練基地が開設され、主に20歳前後の若者、合計1,375人が搭乗員として訓練を受けたとされています。

アメリカ軍のフィリピン進攻に対し、神風特別攻撃隊が出撃した翌月となる昭和19(1944)年11月に、菊水隊12名が南太平洋ウルシー環礁(現在のミクロネシア連邦)へ出撃しました。出撃前に短刀や鉢巻を受け取り、他の隊員などに見送られて、甲板に回天を搭載した3隻の潜水艦に搭乗していきました。

その後、光基地や平生基地を含め、金剛隊、千早隊、神武隊、多々良隊、天武隊、振武隊、轟隊、多聞隊が南太平洋各地へ出撃し、当初は停泊している艦船を、後には航行中の艦船を攻撃しました。また、昭和20(1945)年3月からは日本本土を守るため、関東から九州の太平洋沿岸に基地回天隊が配備されましたが、第一回天隊(白竜隊)は沖縄に向かう途上で消息不明となりました。

こうした回天作戦により、搭乗員106人と整備員など39人だけでなく、回天を搭載した潜水艦の乗組員811人が帰らぬ人となりました。



(3) 徳山空襲 <昭和20(1945)年5月10日>

昭和19(1944)年7月にマリアナ諸島がアメリカ軍に占領されると、サイパンを拠点に日本本土の空襲が行われるようになりました。

昭和20(1945)年5月10日、徳山の第三海軍燃料廠はアメリカ軍による大規模な空襲を受けました。同年4月にアメリカ軍が沖縄に上陸後、九州各地から出撃する特攻機への燃料補給を遮断するため、徳山と陸軍燃料廠のある岩国・大竹を空襲したとされます。

この空襲は、B29戦略爆撃機117機により、燃料廠の東側と西側に分かれて行われました。アメリカ軍の記録によれば、9時52分から10時3分の間に、56機が合計971発の爆弾(242.8トン)を燃料廠東側に、10時7分から10時30分に57機が合計1,046発(261.5トン)の爆弾を燃料廠西側に、それぞれ投下したとされます。

また、別部隊が大浦油槽所に対して、10時5分から10時50分の間に、83機が合計1,533発の爆弾(383.2トン)を投下して大きな被害を与えました。

この空襲により燃料廠の施設は壊滅的な被害を受けるとともに、燃料廠内だけで297人が犠牲となり、廠外の市民を加えると死者500人以上、負傷者は1,000人以上といわれています。犠牲者の中には徳山中学校(現在の徳山高等学校)から勤労働員として燃料廠での作業に従事していた生徒4人が含まれていました。



①



②



③



④

- ①空襲を受ける燃料廠（工藤洋三『アメリカが記録した山口県
の空襲』）。
- ②燃料廠空襲による黒煙と徳山市街地（工藤洋三『アメリカが記
録した山口県
の空襲』）。
- ③空襲後の燃料廠（昭和20年8月）（工藤洋三『写真が語る山口
県
の空襲』）。
- ④大浦油槽所と投下された爆弾（工藤洋三『アメリカが記録した
山口県
の空襲』）。

「学徒動員の思い出」

終戦の半年前、徳山高等女学校二年生の時、学徒動員で徳山燃料廠へ働きに行きました。私達は石油罐作りを担当しました。外のクラスはドラム罐ころがしの仕事やドラム罐の溶接等の仕事でした。

空襲は五月十日のお昼前で、大きな油タンクがみんなもえました。学徒は空襲と同時に遠石の防空ごうに入り、全員無事でした。工員の人は社外に出られなかったので多くの犠牲者が出ました。油タンクが焼けてもまだ私達の石油罐を作る工場は残ったので、続いて終戦になるまで仕事を続けました。（『徳山海軍燃料廠史』より抜粋）

徳山空襲に関する体験談は、『街を焼かれて 戦災40周年徳山空襲の証言』（徳山の空襲を語り継ぐ会、1985年刊）などに、生々しい証言が数多く残されています。図書館等でぜひ手に取ってご覧ください。

空襲の犠牲となった徳山中学校の4人の生徒を慰霊する「久遠」碑。
※学校敷地内であるため、一般の見学はお断りしています。





①空襲により焼け野原となった市街地（昭和20年10月頃）。

桜馬場から新町方向を望む。現在のNTT徳山支店付近。左側は市役所の焼跡。右上の徳山駅まで見通すことができます。

②徳山市役所跡地の現在の様子。

③空襲により家屋が焼けた（白っぽいところ）の多い市街地の様子（昭和20年8月）。

（工藤洋三『アメリカが記録した山口県空襲』）旧国道2号や東川が延焼をある程度食い止めていることが分かります。

<昭和20(1945)年7月27日>

アメリカ軍は戦略爆撃として市街地への空襲を始め、東京など大都市に続き、6月から全国の地方都市も対象に加え、7月26日夜、徳山と大牟田、松山が空襲されました。

徳山では、日付が変わった7月27日午前0時過ぎから空襲が始まり、B29戦略爆撃機97機により、現在の市役所前交差点付近を中心とする半径3キロに対して焼夷弾による爆撃が行われました。アメリカ軍の記録によれば、0時22分から1時35分の間に、焼夷弾だけでも5,416発(718.1トン)が投下されました。

空襲によって引き起こされた火災は、東川や幹線道路が防火帯の役割を果たしたものの市街地の9割が焼け野原となり、482人が犠牲となり、469人が負傷しました。翌朝から市内の医師が徳山小学校で負傷者の治療にあたりましたが、十分な治療はできませんでした。国道（現・県道）沿いには犠牲者の遺体が並べられ、身元を確認したのち火葬に付され、徳山小学校にて合同葬儀を行いました。富田地区でも約20人が犠牲となりました。

④7月の空襲について、『徳山市史 下』（徳山市1958年刊）には、7月26日の午後11時過ぎとあります。『アメリカが記録した山口県空襲』（工藤洋三2020年刊）によると、米軍の作戦任務報告書には7月27日午前0時22分とあり、徳山空襲を報じた防長新聞にも27日零時30分頃と記されています。



「荼毘の煙」

吾々吏員は死体の身元を調べて、死体の一つ一つに住所・姓名・性別・年齢を記した札を付ける仕事だった。着衣の焼けて居らない死体は、胸や雑嚢に付けてある名札で判るが、衣類が焼けて丸裸の者、全く黒焼となっている者等は、年齢や性別さえも判らないのである。(中略)それから三日目の正午迄には全犠牲者の身元が判り、死体の収容を終った。夏ではあるし、五百余名の死体を一ヶ所に収容したので、その酸鼻は眼を覆うものがあった。(中略)市内のお寺の焼跡三ヶ所に臨時火葬場が設けられた。私は徳応寺係となった。火葬準備として当時焼残った木材や、疎開古材を本堂の焼跡にぎっしり詰め、その上に死体を一列にならべた。私はならんだ順に氏名を火葬帖に記入した。親子五人仲良く枕をならべた者や、火災と同時に産気づいたらしく、裸体の母親の側に産れたばかりの嬰兒の死体が側に置かれており、全く此の世ながらの地獄絵そのままだった。(『徳山市史』より。原文は『郷土随筆』第3集)

● 櫛浜への空襲

昭和20(1945)年7月22日夜、日本石油下松製油所を目標とした空襲の際、栗屋旭町の住民が荒神山方面に避難する途中、末武川の荒神鉄橋付近に停車した貨物列車を目標とした爆撃に巻き込まれ、14人が犠牲となりました。



「戦災概況図 下松市」(国立公文書館デジタルアーカイブ)。末武川の西にも被害が示されています。

(4) 戦争体験を語る

福田芳男さん(96歳)

燃料廠空襲時、学徒動員により燃料廠に勤務

5月10日は空襲警報が鳴って燃料廠内の防空壕に逃げたのですが、今宿方面から飛行機が飛んでくのが見え、やがて爆撃が始まりました。しばらくして、いったん爆撃がおさまったので、その間に逃げたのですが、そのあと2回目の爆撃が始まり、後で防空壕に戻ると爆撃で跡形もなくなっていました。



兼重和剛さん(92歳)

市街地空襲翌日、徳山工業学校へ 空襲後の惨状を目撃

7月27日の市街地空襲は夜中の出来事でしたが、父親に起こされ、縁側に出ると焼夷弾が街に降り注ぎ、ドンドンと異様な音がしていました。次の日、四熊の自宅から遠石の学校に向かう途中、市街地の建物が何もなく、遠くまで見通せる様子には目を疑いました。学校に着くと今日は帰ってよいとの指示で帰宅したのですが、道路におびただしい数の遺体が並べられていました。



宇多喜代子さん(89歳)

一番丁の自宅で空襲を体験

7月27日の市街地空襲の時は自宅にいたのですが、空から火の付いた爆弾が次々に落ちてくるので非常に怖かったです。はじめは庭の柿の木にしがみついていたのですが、段々とひどくなって東川の石橋の下に逃げました。我が家が焼け落ちたので、戸田の叔父の所に身を寄せることとなり、叔父が自転車で迎えに来てくれたのですが、道路に遺体がズラーッと並べられていたことを思い出します。



田中賢一さん(86歳)

大津島で、回天訓練を目撃

幼少期に大津島で人間魚雷「回天」の訓練を日常的に目にしました。「回天」は秘密兵器だったので、島民に具体的なことは知らされていませんでしたが、この隊員たちが日本に帰ってくることは、もうないのではないかと感じていました。

出撃の際に潜水艦の上に立って、仲間に帽子や軍刀を振っていた隊員の様子がいまだに目に焼き付いています。



～物言わぬ証言者～

旧市長公舎(慶万町)

大正15(1926)年に建てられた海軍燃料廠長の官舎です。

大正時代を象徴する典型的な和洋折衷の建物で、来客を応接する洋館部と和館部があります。

昭和21(1946)年以降、市長公舎として使われました。



徳山大仏(本正寺。飯島町)

昭和18(1943)年に、西船町(現在の築港町)に造立された大仏です。

7月の市街地空襲の際、大仏の脇にあった防空壕に避難した人々は命を落としたと言われ、頭部には空襲時に受けた損傷が残っています。

昭和29(1954)年に本正寺境内(飯島町)に移されました。



児玉文庫

児玉源太郎が設立した図書館「児玉文庫」は、7月の市街地空襲により焼失しましたが、貸し出されていた図書数冊と貸出箱は戦禍を免れ、現在は中央図書館に展示されています。

また、児玉文庫の跡地は公園として整備され、当時からある古い井戸が残されています。



太華山砲台跡・永源山砲台跡

徳山要港を防衛するため、各地に高射砲陣地などが整備されました。太華山には頂上にレーダー、一段低いところに高射砲が置かれる予定でした。現在は市街地や瀬戸内海の島々などの景色が一望でき、絶好のビュースポットとして親しまれています。永源山は、山頂にあった護国神社を移転のうえ高射砲が置かれました。現在はゆめ風車がランドマークとなっており、聴音機が置かれた付近は母と子の広場になっています。



3.

まちの復興 と飛躍



① 曙部隊兵舎の払下資材を使って校舎を復旧している徳山高等女学校（現在の徳山高等学校）の生徒。昭和20（1945）年11月頃。現在の県総合庁舎付近。（『目でみる徳山の歴史』）。

② 毛利町付近にあった戦災復興資材の集積所。（『目でみる徳山の歴史』）。被災者。

③ 「戦災概況図 徳山市」
（国立公文書館デジタルアーカイブ）

（1）戦災復興都市計画の策定

『戦災復興誌』によれば、徳山の被害は、焼失家屋4,622戸、罹災人口16,512人、罹災世帯5,598世帯、死者482人、負傷者469人とされています。市街地では水道管が破壊されて給水できず、罹災者の多くは縁故を頼って周辺部に離散したほか、自ら建てた雨露をしのぐ程度のバラックや防空壕に居住する人もいました。

物資不足のため、市は、軍の不要となった木材などの払下げを求め、学校の復旧など戦災復興に役立てました。曙部隊の兵舎が市役所や徳山高等女学校などに用いられたほか、軍の倉庫や防空壕に使われていた柱や板なども罹災者の戦災復興にあてられました。

空襲により市街地が壊滅した徳山は、昭和21（1946）年に国から戦災都市の指定を受け、戦災復興都市計画が策定されることになりました。当初は県が、昭和24（1949）年度からは市が事業を継続しました。

戦災復興土地区画整理事業は、防災や保健衛生を考慮した市街地の造成をめざし、市の規模などの特性を基礎とした土地利用計画、街路計画、公園緑地計画を立て、従来の狭く無秩序な街路を新設・拡築して公園や学校その他公共施設を適正に配置し、理想的な市街地をつくることを謳いました。



④昭和23(1948)年頃の徳山駅前の様子。画面中央の空地がその後御幸通りとなります。

⑤昭和22年10月頃の市街地(国土地理院ウェブサイトUSA-R515-2-116)。

徳山駅から御幸通りが整備されつつある様子がうかがえます。区画整理事業の初期であり、戦前から続く街並みを細い道路から読み取ることができます。

⑥徳山復興土地画整理設計図(『戦災復興1959』)。

街路計画は、①全体的に格子状道路網を基本に、部分的に放射状・斜線状のパターンを採用したこと、②市街地の地形を考慮し、将来の下水道敷設等を視野に入れたこと、③鉄道と道路を立体交差としたこと、④歩道を広くとったこと、⑤徳山駅を中心として北口と南口に広場を計画したこと、が特色と評価されています。

「戦後の徳山物語」

都市計画案では駅から国道2号に至る間の幅員50メートルの大道路をはじめ、広い道路が縦横に走っている。これでは狭い徳山が道路ばかりになるという非難めいた巷説も高い。右につき玉野市長は語る。徳山の都市計画については、本市新丁出身の町田復興院土地局工務課長(※)が大変熱意をもたれている。私も大都市並の50メートル道路など余りに広すぎる。せめて36メートル程度でよいのではないかと希望を述べたが、町田課長は将来必ず悔いを残す、道路はウンと広くしておかねばならぬ、と熱心に説かれた。町田さんは都市計画の大権威であり、既成案によることとしたわけである。(『徳山市史』より一部修正。原文は「徳山公論」)

※町田 保(まちだ たもつ)

昭和20(1945)年の戦災復興院発足後、全国115都市と徳山の戦災復興都市計画へ指導・助言をしました。後に所属する日本都市計画学会が日本住宅公団から「徳山市周南住宅地区開発基本計画」の調査を委託されたことから、昭和38(1963)年に調査委員会委員長を務め周南団地計画にも携わりました。



1) 街路・公園の復興

計画では、戦前の市街地の大半が罹災したことから計画された22路線のうち、幅員36メートルの幹線が3路線(国道2号線、徳山駅前線、臨港線)、25メートルが9路線(銀座通り、平和通りなど。銀座通りはのちに20メートルに変更)、特に南北の幹線である御幸通りは幅員50メートルとされて市役所前に環状交差点が計画されました。戦争末期に空襲に備えて行った建物疎開によって生まれた道路が、御幸通りの基礎となりました。

写真①は、整備途中の御幸通りを駅から市役所方向を見たもので、昭和26(1951)年頃の様子です。

写真②は、御幸通りから市役所方向を見たもので、昭和34(1959)年頃の様子です。写真③は現在の御幸通りです。

写真④は、昭和26(1951)年頃に徳山駅から見た有楽町方面です。駅前広場整備のため、建物の解体が進められている様子が写っています。

徳山駅は奇跡的に空襲による被害を受けませんでしたが、駅前には昭和26(1951)年に、四角形の中央島を設けて緑地と池を配し、その北側に三角形の順還島を設ける計画とされました。中央島は通常はバスやタクシーの駐車場として鉄道との接続を便利にし、災害時には避難場所とされました。昭和27(1952)年に完成した後、昭和30(1955)年に車道と歩道が舗装されました。

写真⑤は、昭和35(1960)年の駅前広場です。写真⑥は現在の様子です。



写真⑦は、西浜崎の立体交差です。まちと徳山港を結ぶ交通路として、昭和30(1955)年に踏切を立体交差とする工事を始め、昭和32(1957)年に完成しました。写真⑧は現在の様子です。

写真⑨は、昭和26(1951)年頃の平和通りです。東浜崎には跨線橋が計画され、昭和40(1965)年に「平和大橋」として完成しました。写真中央付近の建物がなくなって平和大橋が架けられます。

また、幹線道路から徐々に車道や歩道の舗装や下水道の整備などが計画的に進められました。

写真⑩は、昭和29(1954)年頃の銀座通りでの舗装工事の様子です。写真⑪は現在の銀座通りです。写真⑫は、昭和31(1956)年頃の銀座通りでの下水道整備工事の様子です。

徳山大博覧会

昭和23(1948)年1月、徳山港は再び開港され、工場などへの物資の輸入や製品の輸出ができることになりました。

再開港を祝うとともに新たな時代の到来を知らせる博覧会として、同年4月から約2か月間、海軍燃料廠跡地や徳山公園などを会場として徳山大博覧会が開催されました。

なお、瀬戸内海にはアメリカ軍の機雷が残っていたことから、徳山防備隊の任務を引き継いだ海上保安庁が掃海を続け、昭和24(1949)年に航路安全宣言が発せられました。



徳山大博覧会駅前大アーチ
(美術博物館所蔵)



公園緑地は市街地面積の2.5%を確保する計画とし、戦災復興を機に軍用地の跡地等を利用して公園を設け、市民の厚生に資するとともに都市の美観を図るとされました。

大公園を2か所と、その他小公園や墓地公園、運動公園が計画され、街路が変則的に交差してできた三角形のような土地を公園としているのも特徴の一つです。のちに公園の数は追加されていきます。

また、東川沿いには緑地が整備されるとともに、大迫田に戦災復興土地区画整理区域内の墓地を集団移転することとし、昭和26(1951)年度までに移転を完了しました。

2つの大公園は、戦前からある「徳山公園」を継承したうえで、新たに大迫田へ運動公園が計画されましたが、海軍の地下タンクが集中する地域は計画から外されていました。

全国的にみた戦災復興事業の二大特色は、防災と美観を兼ねた幅の広い街路と帯状の緑地の整備とされています。周南市の御幸通りはその代表例といえます。緑の社会資本となる豊かで美しい街路や公園はこうした理念を持って整備されました。

写真⑬は、昭和31(1956)年の、多くの市民で賑わう徳山公園(夫婦ヶ池周辺)です。

写真⑭は、昭和35(1960)年の東川沿いに整備された公園の様子です。写真⑮は現在の東川緑地公園です。



2) 商店街の復興

戦後間もなくは建物もまばらで、商店街はバラックばかり、今の銀座通りの道幅は6メートルしかなく、駅前には露天市場が密集して闇市場と化して騒然としていたそうです。区画整理が難航していたこともあり、まずは商店街を復興するため、昭和24(1949)年に銀南街商店街構想がおこりました。

同年9月、有志による銀南街建設組合が発足し、昭和26(1951)年7月に木造2階建34店舗の銀南街が誕生しました。昭和27年に全工事を完工、時期を同じくして中央街商店街も誕生しました。

昭和30年代には銀座通りを中心としてさまざまな店が立ち並び、市内外から来る大勢の人で賑わう商店街が生まれました。

写真①は、昭和26(1951)年頃の誕生間もない銀南街(『目でみる徳山の歴史』)です。

写真②は、昭和27(1952)年に開業した中央街商店街で、アーケードが完成する昭和32(1957)年以前の様子です。

写真③は、現在の中央街です。



写真④は、昭和26(1951)年頃の銀座通りです。写真⑤は、現在の様子です。

写真⑥は、昭和30年代の銀座通りと松下百貨店(昭和31(1956)年に3階建て、昭和35(1960)年に6階建てとなる)です。屋上の遊具が写っています。

町名地番整理委員会

昭和27(1952)年に町名地番整理委員会が発足し、戦災復興土地地区画整理が終わった地区から順次新しい町名が命名されました。昭和30年1月の広報に示され、最終的に昭和35年(第一工区)及び37年(第二工区)の町名が正式に誕生しました。

道路の新設や拡幅により古くからの町の分割や合併が生じたことから、抽象的な町名や町内にある社寺にちなんだ町名や、今宿のように広い地域を分割した場合には一字を生かした例など、新たな町名は地元住民が検討を重ねて誕生しました。

- ・藩政時代からの旧町名や字名を採用したもの …………… 一番町、桜馬場通、辻町、新町、糺町、橋本町など
- ・旧町名や通称など名残を残したもの …………… 新宿通、今住町、原宿町、代々木通、岡田町など
- ・抽象名や他の有名地を採用したもの …………… 銀座、有楽町、平和通、昭通、栄町、緑町など
- ・土地に関わりのある新町名としたもの …………… 権現町、児玉町、毛利町、銀南街など



①代々木公園にある戦災復興記念碑。

復興状況を示す巨大な市街地図と裏面には戦争の被害状況と復興の経過が刻まれています。

②昭和35(1960)年の市街地。

昭和40(1965)年に開通する平和大橋の用地が見えます。
また徳山駅は、昭和44(1969)年に改築され、商店街と複合化した駅ビルとなり、昭和50(1975)年には山陽新幹線が全線開業して新幹線駅が整備されました。



(2) 戦災復興土地区画整理事業の終了

戦災復興土地区画整理事業は、区域内の建物移転と換地の多さなどから昭和25(1950)年時点での進捗は約2割に留まっていました。昭和26(1951)年に駅前周辺の強制移転を行う一方で復興計画の再検討を進め、昭和30(1955)年に復興区域を55万坪に縮小して施工区域を三つの工区に分割し、促進を図りました。

その結果、昭和35(1960)年の第一工区の換地終了をもって戦災復興土地区画整理事業を終了し、同年9月、戦災復興記念として、代々木公園に「太平洋戦争被災復興ここに成る」と記した碑が建立されました。

昭和33(1958)年以降も都市改造事業として継承され、臨海地区や周南バイパス(現在の国道2号)の整備が進み、現在の市街地が形成されました。

また、その後の周南団地建設や周南緑地の整備などにより、市街地は拡大していきました。



①



②



③

- ①昭和30(1955)年の競艇場(『とくやま1955』)。
- ②徳山市広報第91号(昭和28(1953)年8月)。第1回のレース開催のお知らせ。
- ③現在のボートレース徳山。

(3) 競艇事業の開始

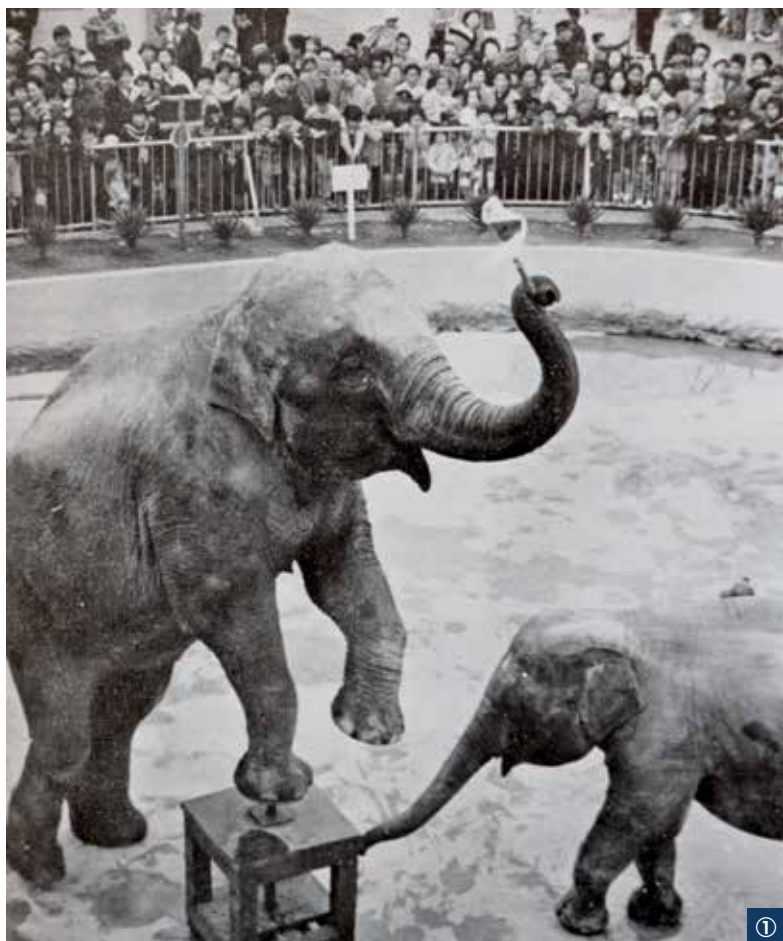
戦災復興都市計画事業に取り組むにあたっては、巨額の費用が必要でした。

そのため、財源を求めて、昭和26(1951)年9月にモーターボート競走場の設置と競艇事業の実施を決定しました。

競艇場を開設する場所として、旧陸軍の砲部隊用地であった国有地を借用するとともに一部民有地を取得し、モーターボート競走場の整地や施設の整備をしました。

当初はボートレース場と聞いて貸ボート屋の大きいものと思う人などもあるなか、短い準備期間のなか県外の競艇場の視察や売り場職員の研修などをすすめて、昭和28(1953)年8月に初レースを開催し、3日間で約2万人が入場しました。

施設の更新などを重ね、現在も市の財政に貢献し続けるとともに、レース開催中などは多くの市民で賑わい、親しまれています。



- ①ゾウの徳子と花子(『とくやま1961』)。
 ②建設中の動物園。
 ③昭和35(1960)年の動物園内。
 ④現在の徳山動物園(ミリンダとナマリ)

(4) 動物園の開園

昭和33(1958)年、戦前から市民に親しまれてきた徳山公園内に、地域の教育・文化の向上に努めるとともに、観光の振興や市民のレクリエーションの場とすることを目的として、動物園の整備が始まりました。

昭和35(1960)年3月、旧徳山市の市制施行25周年を記念して、全国で47番目の動物園として、ゾウやキリン、ペンギンなど80種350頭の動物により「徳山動物園」として開園しました。

動物園には、平成25(2013)年には2頭のスリランカゾウが加わり、現在も子供たちだけでなく、市内外から訪れる数多くの来園者で賑わっています。

平成25(2013)年度からリニューアル工事が進められ、順次供用が始まっています。

なお、動物園入口に展示されているSL「D51」は、昭和15(1940)年に製造され、山陽本線が電化された昭和39(1964)年以降は岩徳線を運行していた機関車です。昭和46(1971)年に当時の国鉄から無償貸与されました。



①

①出光興産竣工式(『目でみる徳山の歴史』)。昭和32(1957)年。

②徳山湾に沿って連なる周南コンビナートの様子(『とくやま1972市勢要覧』)。



②

(5) 燃料廠跡地への出光興産進出

戦後、海軍燃料廠は閉鎖され、民間企業のなかには工場設備が賠償指定を受けたほか、資材や人手不足による操業停止や異なる製品の生産など、企業として苦しい時期が続きました。その後GHQは日本の経済復興を重視するようになり、昭和23(1948)年に賠償撤去方針を取りやめ、同年、徳山港が再開港されるなど、工場の再開が進み経済復興が後押しされました。

昭和21(1946)年、燃料廠石油タンクの底油回収を出光興産(株)が行うことになり、大迫田の地下タンクで作業を行いました。その後、燃料廠跡地は昭和石油と出光興産がそれぞれ製油所建設のため払下げを申請しましたが、昭和25(1950)年に勃発した朝鮮戦争に伴い連合国軍が接收、昭和30(1955)年になって日本政府へ返還されることが決まり、出光興産(株)へ徳山の燃料廠跡地が払下げられました。

出光興産(株)は、昭和31(1956)年3月に徳山製油所の起工式、翌年5月に竣工式を行い、事業を開始しました。

その後、埋立地の造成や菅野ダム建設など工業用水の確保、港湾整備などを進めたことにより石油化学コンビナートが形成され、現在では全国でも有数の複合化学コンビナートとして、多種多彩な化学製品を生み出しています。



- ①『周南団地』。昭和48(1973)年の周南緑地や周南団地。昭和50年に開業する新幹線の高架が建設中です。
- ②「工事現場より徳山湾を望む」(周南団地)昭和42年(山口県文書館)。
- ③「旧海軍燃料廠跡 徳山市」グラフ山口土木518(山口県文書館)。解体中の大迫田の地下タンク。現在もいくつかのグラウンドでタンクがあった痕跡を感じることができます。

(6) 周南緑地と周南団地の整備

昭和23(1948)年、国は、旧軍用地をはじめとした国有財産を公園緑地や墓地などとして使用する場合は公共団体に無償貸付できることとしました。昭和24(1949)年、市は大迫田の約68ヘクタールを公園とすることにし、そのうち約23.5ヘクタールに野球場や陸上競技場等を整備するとして無償貸付を受けました。それ以外の約44.5ヘクタールもゴルフ場などを整備する計画とされました。

その後、昭和36(1961)年に、工場用地を造成するため横浜沖の第四号海面埋立事業に着手することとなり、広大な丘陵地からは土砂が次々と埋立地へ運ばれました。

また、昭和37(1962)年には日本住宅公団が約220ヘクタールに及ぶ周南団地の建設計画を決定しました。一部が公園計画地と重なったことから、代わりに京都大学演習林を公園(現在の西緑地)としました。

昭和39(1964)年に周南地区が工業整備特別地域の指定を受けたことの影響もあり、市民へ住宅を供給するため、同年に団地の造成に着手し、昭和49(1974)年に完成しました。

なお、昭和43(1968)年以降、開発の障害となっていた旧海軍の地下タンクは順次解体撤去され、昭和47(1972)年に東緑地と中央緑地が完成し、スポーツ施設が整備されました。

現在、周南緑地のスポーツ施設はリニューアル工事が進められ、順次供用が始まっています。

4. 平和を 未来へ



- ①回天記念館の館内。回天搭乗員の遺影や遺品などを展示しています。
- ②回天記念館の外観。
- ③敷地内にある回天碑。

回天記念館
ホームページ▶



(1) 回天記念館と現在に残る遺構

回天記念館は、回天搭乗員の遺書・遺品、関連資料など約300点を展示し、平和の尊さと命の大切さについて発信しています。

戦後、大津島の回天訓練基地跡は、高台の練兵場跡へ昭和24(1949)年に馬島小学校が移転開設されました。昭和40(1965)年に整備工場跡に小学校が再移転したことから、民間団体によって記念館の建設資金を集める活動が始まり、昭和43(1968)年に現在地に回天記念館が建設され、市へ寄贈されました。

その後、戦後50年を契機として展示の見直しを行い、平成10(1998)年に研修棟を増築のうえ、平和学習施設として展示内容をリニューアルし、現在も多くの入館者が訪れて回天について、そして平和の尊さについて学ぶ機会を提供しています。

大津島基地のうち、学校用地となった整備工場跡を除く国有地は、昭和42(1967)年に市へ無償貸付され大津島公園となりました。また、回天を運搬したトンネルを抜け海上に突き出たコンクリート構造物は、戦後50年を契機として平成7(1995)年に劣化箇所の修復が行われています。

大津島小中学校の敷地とその周辺には、変電所などの施設のほか、工場を取り囲む塀が残り、回天訓練基地として唯一現存する遺構であり、また戦争の実態を伝える貴重な遺構として、年間を通じて多くの見学者が訪れています。



④回天訓練に使用された魚雷発射試験場跡。

⑤整備工場から回天を運搬するためのトンネル。一部、トロツコが行き交えるよう複線になっている箇所があります。

⑥回天訓練基地（魚雷発射試験場）跡には、回天を整備工場から運搬するトロツコのレールが敷かれ、海面へ降ろしていたクレーンの基礎が残っています。



また、回天記念館の敷地内には、昭和35(1960)年に有志によって建立された回天碑があり、回天が初めて出撃した11月上旬に慰霊祭が行われています。また、8月15日には、敷地内にある「平和の鐘」を鳴らして世界の平和を願う活動が続けられています。

なお、戦没者や戦災の犠牲者を慰霊するため、昭和56(1981)年に児玉公園内に慰霊碑が建立され、徳山が空襲された5月10日に戦没者の追悼式が行われるなど、今でも市内各地で平和を願う取組が続けられています。

そのほかの回天訓練基地については、光基地・平生基地の遺構は残っていませんが、光市文化センターには回天の弾頭部実物が展示されており、平生町阿多田交流館には隊員の遺品等が展示されています。大神基地跡には公園が整備されています。

(2) 平和を継承するまちづくりへ

戦禍に遭う前の賑わっていたまちと市民の平穏な暮らしは、戦争により、家族の命が奪われ、まちも壊滅的な被害を受けて失われるなど、市民一人ひとりの人生に大きな影響を与えました。

戦後、焦土と化したまちを、多くの市民がより良い生活と幸せを求めて努力と苦心を重ね、助け合うことによって、再びまちは今日まで発展を続けてきました。

今回紹介が及ばなかった地区や、詳しく取り上げることはできなかった昭和50年代以降においても、市内各地区での日常生活における変化や、新幹線や高速道路の開通、文化会館や総合スポーツセンターなどの施設の整備充実、産業構造の変化や脱炭素化への取組など、更なる社会の変化と発展が続いています。

将来世代に対して、今よりも素晴らしいまちを受け渡していくためには、市民一人ひとりが、本市における戦争の歴史を知り、戦争の悲惨さや、平和の尊さ、命の大切さについて考え、戦争を繰り返してはならないことを実感するとともに、戦後のまちづくりを担ってきた先人の努力や想いを受け継ぎ、その功績を未来に伝え、つなげていくことが肝要です。

また、回天訓練基地跡の遺構保全や回天記念館において展示する資料の紹介を通じて、広く周南市からの平和発信も続けていくことが必要です。

本市のまちづくりの基本理念は「将来世代へ 責任あるまちづくり」です。

一人ひとりがふるさとへの愛着と誇りを高め、平和を継承・発信していきましょう。



令和元(2019)年の徳山駅前

関係略年表

和暦	西暦	出来事	分類
大正 10	1921	海軍煉炭製造所から海軍燃料廠へ改称	戦禍の前
大正 11	1922	徳山港の開港決定	
大正 15	1926	燃料廠長官舎建築（戦後、市長公舎へ）	
昭和 3	1928	徳山公園の整備開始	
昭和 9	1934	岩徳線の開通	
昭和 13	1938	徳山港の海軍要港指定 この頃、大津島に魚雷発射試験場が整備される	
昭和 16	1941	太平洋戦争開戦	太平洋戦争
昭和 19	1944	大津島に回天訓練基地開設、回天訓練の開始、初出撃	
昭和 20	1945	5 月 10 日 燃料廠空襲 死者 500 人以上、負傷者 1,000 人以上	
		7 月 27 日 市街地空襲 死者 482 人、負傷者 469 人	
		太平洋戦争の終結	
昭和 21	1946	戦災復興都市計画の策定	復興と飛躍
昭和 23	1948	徳山港の再開港、徳山大博覧会の開催	
昭和 25	1950	朝鮮戦争の勃発	
昭和 26	1951	銀南街の誕生	
昭和 28	1953	競艇場の開設	
昭和 30	1955	戦災復興都市計画の改定	
昭和 32	1957	海軍燃料廠跡に出光興産進出	
昭和 35	1960	徳山動物園の開園	
		戦災復興都市計画事業の終了	
昭和 36	1961	第 4 号海面埋立事業の着工	平和を未来へ
昭和 37	1962	周南団地建設計画の決定	
昭和 39	1964	工業整備特別地域に指定	
昭和 43	1968	国道 2 号（周南バイパス）の着工	
昭和 44	1969	回天記念館の開館	
		徳山駅ビルの完成	
昭和 50	1975	山陽新幹線岡山～博多間の開業、周南バイパスの全線開通	

主な参考文献

- 『徳山市史』下巻…………… 徳山市、1985年
『街を焼かれて 戦災40周年徳山空襲の証言』 …… 徳山空襲を語り継ぐ会、1985年
『目でみる徳山の歴史』改訂版 …………… 改訂版出版実行委員会、2012年
『アメリカが記録した山口県の空襲』 …………… 工藤洋三、2020年
『山口県史』通史編現代…………… 山口県、2022年



周南市戦後 80 年事業
特設サイト

想いをつなぐ、未来へ。
昭和100年これからの周南



戦後80年